



富岡製糸場と絹産業遺産群事前視察見聞録

世界遺産登録へのフロー

平成 24 年 7 月 24 日	文化審議会世界文化遺産・無形文化遺産部会(文化庁の推薦決定)
平成 24 年 8 月 23 日	世界遺産条約関係省庁連絡会議(国の推薦決定)
平成 25 年 2 月 1 日迄	推薦書をユネスコ世界遺産センターへ提出(国(文化庁))
平成 25 年 夏～秋	国際記念物遺跡会議(ICOMOS)の現地調査
平成 26 年 夏審議	世界遺産委員会で登録決定(ユネスコ)

㊦ 事前視察の目的

私達のまち「伊勢崎」に世界遺産に登録されようとしている「田島弥平旧宅」があります。伊勢崎市景観サポーターとして惜しむことなく協力をしていきたいと願っています。ところが残念なことに「関連 4 施設のすべてを見学済である。」という訳にはいきませんでした。「地元の我々が知らなくて何が出来るのか。」と駆り立てられるように関係各所と連絡を取り合い下仁田町「荒船風穴」・富岡市「官営富岡製糸場」・藤岡市「高山社跡」と視察ツアーに行くこととなったのです。各市町の文化財保護課担当者、ボランティアで案内をしてくださった方々に紙面を借りて改めて御礼申し上げます。

㊦ 視察の行程

- 平成 24 年 7 月 21 日 土曜日
- 伊勢崎市→荒船風穴→富岡製糸場→高山社→伊勢崎市(移動は自家用車)

㊦ 見聞録 目次

1.行程で感じたこと	2.下仁田町「荒船風穴」	3.富岡市「官営富岡製糸場」
4.藤岡市「高山社跡」	5.伊勢崎市「田島弥平旧宅」	6.視察見聞録総括

見聞録 1 : 行程で感じたこと

私達は伊勢崎発:北関東自動車道→上信越自動車道→国道 254 号線→下仁田町ふるさとセンター経由、荒船風穴→上信越道→富岡製糸場→上信越道→県道 41 号線→高山社跡→上信越道→北関東道:伊勢崎着と走行距離およそ 170km のルートをとりました。途中の国道、県道沿いには主だった標識や世界遺産登録を歓迎する類の看板等は見つける事が出来ませんでした。また、関連 4 資産間の連携を感じさせる案内標識も皆無でした。

田島弥平旧宅を含め4施設間の観光客受け入れの連携はできていないように感じられ、関連施設を連続して見学することを想定した施設同士の誘導標識が必要と感じました。

更に欲張ると外部からの訪問者を「迎えるところ」を県民の方々が持っていただくと素晴らしいと思いました。(佐藤よ)

見聞録2：下仁田町「荒船風穴」

私達は「富岡製糸場と絹産業関連施設事前視察ツアー」と称して、伊勢崎市の景観サポーターの仲間4人で荒船風穴、富岡製糸場、高山社跡の3ヶ所を見学して参りました。

これらは、平成24年8月23日、世界遺産条約関係省庁連絡会議が、2014年の世界遺産登録を目指し、伊勢崎市の田島弥平旧宅と併せて、「富岡製糸場と絹産業遺産群」としてユネスコへ推薦することを正式決定した産業遺産群です。

最初に向かったのは下仁田町の荒船風穴。標高840mの西上州の山岳地にあります。

まず「下仁田町ふるさとセンター」へ寄り展示物の見学や風穴の事前説明を聞き、国道254号から群馬県道44号線へ入り現地へ。県道44号線は対面交通もままならない狭い一本道。下仁田町のHPによれば、見学希望者は神津牧場からのルート(神津牧場駐車場から往復徒歩1時間程度)を薦めています。

林道風の狭い道路をひた走り、現地へ到着。現地駐車場には事前連絡していた説明員の方が待機していてくれて、全体の説明を聞き、早速に見学開始です。駐車場から風穴までは徒歩数分。ほんの少し登山気分を味わえます。



荒船風穴 2号(手前)と3号

荒船風穴。3号(手前)と2号



風穴は全部で3基あり、標高の高い方から順に1号風穴、2号風穴、3号風穴と呼ばれ、山の斜面勾配に応じて少しずつ高低差があります。風穴のサイズは、最も大きな2号風穴が長手方向=20.9m、2番目に大きい3号風穴=14.5m、最も小さな1号風穴=12.7mです。

「下仁田町ふるさとセンター」には風穴と周囲のジオラマが展示されていて、当時、この風穴の中に建てられていた貯蔵建物が復元されています。

3号風穴の下には温度計が設置され、見れば14度を示しています。また1号風穴脇の温度計は大気温度=12.1度を指し、風穴内部はなんと1.4度です。この日は、全国的に異常に涼しい日でしたが、それでも真夏にこの温度は低く、この場所がいかに冷気の漂う場所であったかが分かります。

また、各風穴は壁面の巨岩が自然のまま利用され、現在もその形のまま残る事から、これらの岩や石積みがしっかりとかみ合い、安定していることが予想できます。

事前情報では、率直に言ってあまり期待していなかったここ「荒船風穴」。

ところが、現地に立ちその冷気に身を包まれ、風穴内気温1.4度を確認した時、山岳地の風穴と言う自然の冷気メカニズムを利用し、蚕種を冷蔵保存し、通年に亘る養蚕業の実現に大きく貢献した先人の知恵に触れ、事前イメージをはるかに超える感激がありました。

この日、荒船風穴で事業を営んでいた「春秋館」のこと、また、春秋館と伊勢崎境島村の養蚕農家との縁、藤岡の高山社との関係など、資料やパンフレットを入手し、また現地での説明などを聞き絹産業遺産群に関するいくつかの謎が解けました。

(上岡)

見聞録3：富岡市「官営 富岡製糸場」

富岡製糸場を見学して ～遺産保護の情熱が賑わいを生む～

世界遺産候補として話題の地元群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」を景観サポーターの仲間と見学してきました。私は富岡製糸場について記述します。

この富岡製糸場は、絹遺産群の中核をなす遺産です。この世界遺産登録の盛り上がりを経て、富岡市に活気が生まれてきていると私は感じました。街なかに駐車場が3箇所も整備されていました。私たちは、第3駐車場を利用したのですが、製糸場に行くまでに、有名な「七味とうがらし」の店がかつての地味な店舗を改装して熱心な店売りを行っていたりして、街の活気を感じました。

高速道路が開通したら高速PAにそつなく出店している「峠の釜めし」のおぎのやは、製糸場近くの魅力的な場所に出店しています。宮本町商店通りも観光客にねらいを変え、賑わいを取り戻してきていると聞いていたのですが、今回は製糸場周辺の街なかを散策できなかったのが残念でした。さて、富岡製糸場ですが、ボランティアの方が約1時間コースで案内をしてくれます。休日でしたが、来場者が絶え間なくありボランティアの方が休みなく説明に対応していた事をまじかに見ますと、マスコミ等に取り上げられる機会も多く、今話題のスポットであることを実感しました。



この富岡製糸場は、明治5年(1872年)にフランス人技師ブリュナの指導のもと、日本初の官営機械製糸場として設立されたものですが、



和洋技術を混交した工場建物の長さ100メートルを超える木骨レンガ造りの繭倉庫は圧巻です。製糸場の内部については、すべて見学できるわけでないのが残念です。それにしても、操業停止になった後も片倉工業(株)がこの製糸場を「多額の経費をかけ維持管理した。」という説明を聞き日本企業として「残していくべきものはコストをかけても残していく」という意識をしっかりと持っていたことに感動をします。このような企業の努力があり、今回の世界遺産登録と

いう道につながったのではないのでしょうか。

景観サポーターとしてこの富岡製糸場を見学し、街に賑わいが失われている中で「賑わいを取り戻そうとしている富岡の街の意気込みを感じました。」そして、その核にある「富岡製糸場」は、「残していくべきものは残す」という企業や地元の努力、意思があって現在の姿があるのであり私たちの街でも実践していくべきことであると思いました。

(角田)

見聞録4：藤岡市「高山社跡」

「富岡製糸場と絹産業関連施設視察ツアー」の最終見学地は

高山社跡（たかやましゃあと）。

高山社跡は平成24年7月12日、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、文部科学省世界文化遺産特別委員会において、推薦候補として決定されたことを受けて、土日祝祭日にも開館し、午前9時から午後4時までは解説員の方が現地に常駐して解説を行っています。



場所は藤岡市高山。高山社の創始者・高山長五郎の名字が地域の地名になっています。高山家は代々名主を務める家柄だったとのこと。建物は群馬県道176号沿いにあり、道路から5~6m高い位置に建つ重厚な造りの長屋門が一際目立ちます。

この日、解説員の方に蚕室内部や敷地内の建造物について丁寧に解説していただき、特に蚕室については、一階や二階、屋根裏まで見学させていただき、長五郎が

研究と試行錯誤を経て確立した養蚕飼育法の一つ「清温育」にとって、非常に重要である換気構造や火鉢用の炉の役割等について、現物を確認しながら学ぶことができました。

高山社の蚕室の大きな特徴は、入母屋の上に造られた通風用高窓（高山社では「気抜き」と呼ぶとのこと）で、島村の養蚕農家の高窓が屋根の全幅に亘っている家屋が多いことに対し、高山社は3つの独立した高窓になっています。この3つの高窓の位置に、それぞれ各階を貫通する換気構造と加熱用の火鉢用の炉が設備されています。建物の外には外便所、排水貯水槽、桑貯蔵庫、井戸、台所・風呂などが残されています。

明治末期から大正時代にかけて日本の養蚕技術を指導した高山社発祥の地「高山社跡」。

高山長五郎は、自身が確立した「清温育」の技術を全国に広めるべく、「養蚕改良高山社」を組織し、全国から生徒を集め、第1種が本科生一学年30人、第2種が300人、1年を1期として3年で卒業と言う、現代で言う「養蚕技術専門学校」のようなシステムを築きました。

高山長五郎没後、その意思を継いだ町田

菊次郎は高山社を益々発展させ、明治34年には明治期における全国唯一の私立甲種養蚕学校として開校します。この時の生徒は本科と別科に分かれ、本科は1学年50人、3年で卒業です。別科は男子部・女子部からなり、授業は3学期制で、3年で卒業です。

明治時代に養蚕技術を学ぶ私設専門学校を創設し、この高山社がその発祥の地として重要な役割を果たしたこと、それらの情報を見学した今回の高山社跡。当時の生徒や教師たちが、この地、この場所で日々切磋琢磨して技術の修得に勤しんでいた事に想いを馳せると、自分もタイムスリップしてその場所にいたような錯覚に陥りました。



（上岡）

見聞録5：伊勢崎市「田島弥平旧宅へつなぐ」

今回の事前視察では、境島村の田島弥平旧宅には出向くことが出来ませんでした。構成4資産の絹産業として、作業工程(蚕種製造・蚕種貯蔵・養蚕・製糸)の最初を担う境島村の蚕種製造業は、明治初期の日本の近代化の礎となりました。田島弥平旧宅はその中心的存在として、飼育法や近代養蚕農家建築の規範としての役割を担っていました。

■近代養蚕農家の原型である田島弥平旧宅■

田島弥平旧宅には、現在約1,200坪の屋敷地に、主屋・桑場・別荘・井戸屋・種蔵等の建物が現存し、かつては香月楼・新蚕室がありました。既にその父弥兵衛(1796～1866)の代より蚕種家として蚕の飼育技術で知られていましたが、弥平(1822～1898)は更なる飼育法の研究を深め、自宅を実験場ともしながら、「清涼育」という飼育法を提唱しました。その著書『養蚕新論』(明治5年)の蚕室論では、「最も重要なことは換気である」「南面して建てる」「高く造り、四方に窓を設ける」「屋根中央に開閉できる小窓を設ける」「建物近くに立つ樹木はすべて伐採する」「簾を設える」と記しています。

また『続養蚕新論』(明治12年)では、主屋に先立ち、香月楼があったところに実験用蚕室を建て、最初は檜の無い瓦葺屋根、次に屋上棟の中央に窓3箇所を開け、更に総檜で2階の四方の壁を窓にする等順次検証し、ついに総2階建てで瓦葺きとし、棟に窓を付け2階の四方の壁を窓とした「近代養蚕農家」の原型とされる建物が完成されました(後に「香月楼」と呼んだ)。その建築年は安政3～5年(1856～1858)で、群馬県で明治期以降の養蚕農家の多くに、様々な形式の檜が付いているが、その初現が田島弥平旧宅であることを知ることが出来ます。ちなみに「近代養蚕農家」という呼称は、現在群馬県世界遺産推進課の課長である松浦利隆氏が、それ以前の養蚕農家と区別するために呼んだものです。

現存する主屋は、伊勢崎市教育委員会の調査で棟札が発見され、文久3年(1863)の建築であることが判明しました。香月楼での実験に基づき、主屋で実践したものです。木造総2階建て、切妻造、瓦葺きとし、棟には総檜が付けられ、桁行13間半(25.38m)、梁間5間(9.4m)と規模が大きく、境島村の蚕種業の歴史を表出し、群馬県での養蚕業へも多大な影響を与えた近代養蚕農家の原型を伝える極めて貴重な建物です。更に「清涼育」の総仕上げとして、明治5年(1872)頃主屋東に養蚕専用の新蚕室が建てられ、まさに巨大蚕種製造工場的な田島弥平旧宅の全容が完成されました。ちなみにこの新蚕室は昭和27年頃撤去されましたが、明治のはじめ、山形県鶴岡市国指定史跡松ヶ岡開墾場の養蚕建物のモデルとされ、今に当時の佇まいを伝えています。

■世界遺産登録運動から地域づくりへ■以上のような歴史的価値を持つ田島弥平旧宅は、平成24年9月19日国の指定史跡となりました。世界遺産登録への機運が高まる中、単なる来場者の増加に対する施設整備といった受け身の観光対策ではなく、田島弥平旧宅を中心に周辺の大型養蚕農家群や豊かな景観をも資源とした、境島村らしい地域の将来像を模索し、真に多くの地域住民にとって暮らしやすく誇りが持て次の世代に受け継ぎたいと思われる地域づくりを実現すること。それが訪れる人にとっても永く魅力的な「境島村」とするために欠かせない取り組みであると思われま。世界遺産登録運動は、これからの新たな地域づくりへの第一歩なのです。

(栗原)



田島弥平旧宅建物配置



田島弥平旧宅主屋

見聞録6：富岡製糸場と絹産業遺産群先行視察見聞録総括

◎ 全てを見学して思うこと

4 資産を見学して感じたことは「是非、関連資産すべてを訪れてもらいたい。」という事です。各々でボランティアガイドの説明を聴く事により「何故、世界遺産として登録されようとしているのか」また「4資産の関連」が理解できると思えたからです。その為に「富岡製糸場と絹産業遺産群受講修了証」といったポイントカード的なものの発行が有効と考えました。

また、見学の順番も大切で 1 番「田島弥平旧宅」2 番「荒船風穴」3 番「高山社」最後が「富岡製糸場」となります。この順番が蚕種業を理解するうえで望ましいのです。しかし、地理的に無駄が多く時間的にも 1 日では回りきれないでしょう。それを欠点とみることなく「リピーターにつながる」と考える事が出来ます。伊香保、草津、四万、水上などの県内温泉と組み合わせ是非、複数回訪れて頂きたいものです。



お富ちゃん

◎ もてなしについて思うこと

迎える側のもてなし(準備)として早急に整えていただきたいことは、そこに住む人たちの

「迎える心の育成」です。伊勢崎市境島村を例とすれば田島弥平旧宅を中心に周辺の養蚕農家を巡るルートが検討され、数十人が集落の中を歩くこととなります。不快に思う人もいるでしょう。しかし世界遺産に登録された希少性、重要性を理解し快く迎えるよう地区毎の勉強会や先進地視察(世界遺産登録先進地や“まちおこし”に成功している地域など)を行い登録されたことの意味を学ぶことが大切と考えます。それが住民の心の中に備わることにより連鎖的に盛り上がるでしょう↓

- ・地域が自然と綺麗になっていくでしょう。
- ・お休み処を開く“おかみさん会”も組織されるでしょう。
- ・景観に配慮(高さ、配色、意匠)した案内板が設置され観光地としての雰囲気造りにつながるでしょう。

加えて大切なことは観光客がまず腰を下ろす「観光拠点」の整備。蚕のふるさと公園、福祉交流館しまむら、JA しまむら跡地、島村公民館などです。(利根川の「島村の渡し」を利用することも風情がありますが欠航が頻繁で難しい)その設置により外部からの訪問者が「とにかくその拠点に行こう」となります。

◎ ボランティアガイドの展望

地域の歴史や施設について観光客を案内する、とても重要な役目で「地域の顔」となります。蚕種の会のみでなく市全域から募集することが広がり啓蒙につながると思います。

◎ 視察を終えて思うことは周辺住民の戸惑いです。世界遺産登録で何が始まるのか。どう対策を講ずれば良いのか暗中模索・・・でも明日は必ずやってくるものです。(佐藤よ)

景観サポーター情報誌「いせさき美尋」とは？

美尋の「美」→多方面から考察した美しいもの。「尋」→素晴らしい景観を尋ね求める。対象物の本質の探究。景観サポーターは、伊勢崎の自然、歴史、地域文化、先進性等景観の大切さ・素晴らしさ・美しさを多方面から尋ね(美尋)、景観の価値を学び・発見すべく研鑽を重ね、その発表の場を「いせさき美尋」と名付けました。

発行／いせさき景観サポーター編集部

『いせさき美尋』景観サポーター情報誌第4号

平成24年9月29日発行 連絡先／090-1252-2509(佐藤)



石垣と垣根の小路